

中世萱津を考える

● 蔭山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・
鈴木正貴・松田訓

中世における尾張国萱津宿の性格と景観を復元する為に、中世萱津宿に関する文献史料と寺社の分析、明治17年作成の地籍図の分析、現在の地形解析、当該地の地表面踏査・表採遺物の図化などの考古学的調査を行なった。その結果、中世における萱津の津の位置を推定し、萱津が旧庄内川と合流する旧五条川の津として存在した津であることを示した。また地籍図の解析や考古学的所見から中世の萱津宿が北から形成され順次南に展開していった可能性と鎌倉街道の西に寺院群が並んだ景観を想定するに至った。

はじめに

円覚寺蔵『尾張国富田荘絵図』は、中世における尾張国海部郡域の情報を私たちに伝えてくれ、各方面から絵図に関する研究が進められている。

さて、当センター中・近世研究部会でも『富田荘絵図』は研究の対象として、現海部郡大治町にあたる富田荘域について地籍図・地形図などを利用しながら検討が行われ、そこで得られた成願寺の位置・庄内川流路の復元結果などが当センター『研究紀要第5号』で発表されている（中・近世研究部会2004）。また、加藤博紀によって中世荘園・用水水系・現在残る萱津寺院・地籍図から海部郡甚目寺町にあたる富田荘域の検討（寺院址・道路の推定等）が当センター『研究紀要第7号』で行なわれている（加藤2006）。

今回、これまでの研究をふまえて、蔭山・加藤・鬼頭・鈴木・松田の5名は中世萱津に注目し、旧河道の流路復元から中世の港湾として著名な萱津について検討を行うことにした。なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴う変更された地名ではなく、西暦2000年（平成12年）時点の市町村名を使用し、明治17年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。（加藤博紀）

文献資料等から見た中世萱津

加藤は、上記の通り円覚寺蔵『富田荘絵図』と地籍図の比較を素材として、中世の甚目寺町に関する小論を記した。これをふまえて文献や歴史地理の立場から中世萱津周辺の景観復元を行いたい。

（1）同時代史料から見た中世萱津

中世萱津を文献から見た場合、きわめて限定されたものしか残存していない。以下に、出典文献とその文献に登場する萱津の概要を記す。

①『海道記』1223年（貞応2）4月7日

海道記の作者、京より鎌倉へ下る途中、津島渡を経て尾張国萱津宿に泊まる。ついで三河国矢作宿・豊河宿に泊まる。津島から萱津への途中で見た養蚕・農耕の風景を記述する。

②『東関紀行』1242年（仁治3）8月半ば

東関紀行の著者、京より鎌倉に下る途中、尾張国萱津東宿を経て熱田に泊まる。ついで三河国八橋を経て矢作宿に泊まる。萱津の東宿でみた定期市の風景を記述する。

③『北野社一切經奥書』1412年（応永19）

「尾張国愛智郡萱津堀江定光院」の記述。

④『東院毎日雑々記』1426年（応永33）9月21日

日記の著者、興福寺東院主光暁が、伊勢神宮・津島天王社参詣の後、萱津を拠点に甚目寺・熱田宮を参詣する。

⑤『經覺私要鈔』1468年（応仁2）

「自京都至鎌倉宿次第」として近江・美濃の宿を経由して、「折戸(下津)」から二里の距離、「熱田」へ三里の距離との記述がある。

以上の文献から見える中世萱津の姿は、美濃からの街道(鎌倉街道)と伊勢からの街道の交接点に位置する宿場町と周辺地域の物流を担う定期市の所在地という姿である。

「萱津東宿」という文言や「尾張国愛智郡萱津堀江定光院」が現在の新川町西堀江長谷院にあたる想定があることから、中世萱津の範囲が、現在の萱津の東側にも広がることが想像される以外、文献から施設・場所を特定できるものはない。

(2) 近世編纂物から見た中世萱津

中世萱津は、村人の記憶として伝承され、近世編纂物にその一端が記載されている。『尾張徇行記』の稲葉地村の条を見ると、中世萱津の景観を想像させる記載がある。(原文は縦書)

一此村ハ大体村立ヨキ所ニテ中以下小百姓多シ、本郷ハ瀬戸三ツニ分ル、上ノ切小鍋西市場ト云、支邑東宿ト云、是ハ昔時萱津宿ツ、キ也、字町東町西ト云、庄屋善内、北ノ方十六軒屋敷ト云所アリ、字ヲ元町ト云、古茶屋アリテ女郎ナトモアル由、サレハ東宿西古堤新田内三昧アリ、コ、ニ女郎墓ト云所アリ、コ、ヲ古小栗衝道ト云、今ノ庄内川ヲ枇杷川ト云、下萱津村ノ銀杏ノ木アル所古渡場ノ由、万治年中ニ大川繰出ニナリ、古堤日比津稲葉地両村ノ間新田ヲ開墾セリ、古ノ小栗街道ハコ、ヨリ上中村米野村露橋村古渡村ヘカ、ル、今ノ無三戸林ノ辺古街道ノ由

(略)

一此村ハ高二準シテハ佃力不足シ、八ツ屋村鎌須賀村万場村アタリヨリ承佃スルト也、此辺日比津村ヨリツ、キ沼田古ヘノ川アト、ミエタリ、前条ニ記セル女郎基ノ端ニ、鷹野橋トテ橋ノ跡アリ、旧欄杭ノ遺リタルフルキ木ナト出ルト也、是ヨリ萱津村ハ川向フニ当リ、銀杏ノ木ノ所ヘ古ノ横越アル由イヒ伝ヘリ

以上の記述と比較しながら萱津東宿と考えられる集落付近の地籍図を精査すると、三昧(墓)に関しては1箇所発見できた。その場所は旧河

道の自然堤防の端に位置している。ここが女郎墓のあった地点と考えれば、この自然堤防が「東宿西」の「古堤新田」と考えられ、下萱津への渡り場の地点へつながる道が『尾張徇行記』の記述通り墓の西に隣接して所在する。さらに二つの文を総合すると、「古ヘノ川アト、ミエ」る「日比津村ヨリツ、キ沼田」には「鷹野橋」の跡があることになる。

また、稲葉地村と上中村をつなぐ道も確認することが出来た。これはおよそ米野村の方向へまっすぐ伸びており、小栗街道(鎌倉街道)であったと考えられる。以上の『尾張徇行記』の記述を地籍図中に記したもののが図5である。

以上の『尾張徇行記』の記述が正しく伝承されているとするならば、庄内川は現在の堤防よりも稲葉地村北側から日比津村南側にかけて入り込んでいたと考えられ、その自然堤防上に古堤があり、その古堤からやや離れた地点に萱津東宿が設けられていたと考えられる。さらに、『寛文村々覚書』を見ると、下河原村の用水が「稲葉地村余リ水カ、ル」とされていた。すなわち、下河原村は船で対岸の稲葉地村から水を運んでいたことになる。近世において用水は村同士の紛争の火種になることが多かったことを考えあわせると、稲葉地村と下河原村は古くから強いつながりがあったことが考えられる。この理由は稲葉地村と下河原村が地続きであったと考えたい。すなわち、中世の庄内川は下河原村の北側を流れていたと考えると、下河原村北側を流れる庄内川は五条川と合流し大きく蛇行し、稲葉地村と日比津村付近へ向かう。そして再び大きく蛇行し南流していたと考えられる。

以上から、庄内川は稲葉地村から下河原村にかけて大きく蛇行して五条川と合流しており、その蛇行する攻撃面の両側に集落が形成され、そしてその中を鎌倉街道が貫いていたと考えられる。

(3) 寺院から見た中世萱津(図1)

萱津には現在も歴史を誇る寺院が多くある。さらに、『甚目寺町史』に古者の伝承として、「萱津の七ツ寺」というものがあったという。その七ツ寺とは、「円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂・妙勝寺・宝泉寺・正覚院(現長福寺で名古屋市中区大須七ツ寺)」のことであるという。蛇足

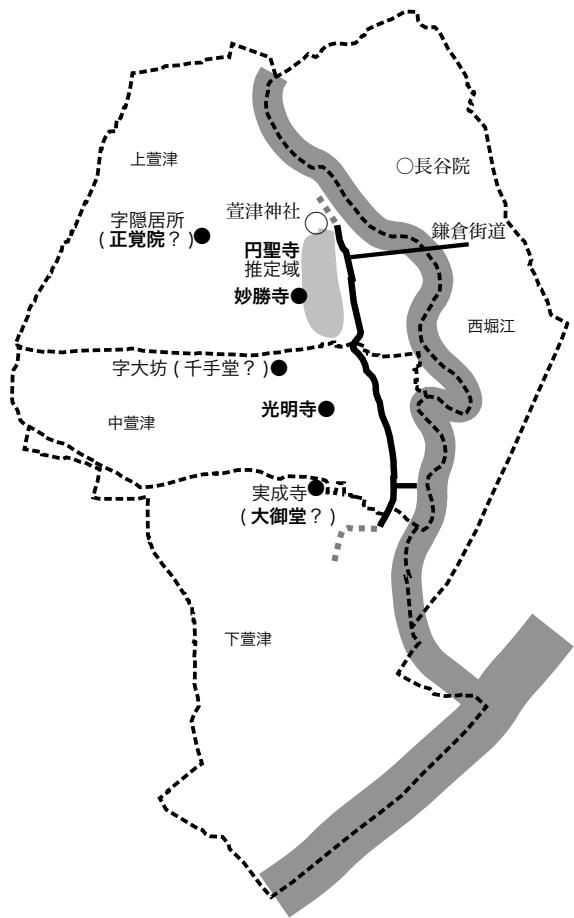


図1 萱津の七ツ寺の推定

ではあるが、鎌倉時代に描かれた富田荘絵図に記載される萱津宿の円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂の4寺は、すべてこの「七ツ寺」に含まれる。すなわち、この4寺の創建は鎌倉時代以前である。このうち、光明寺・妙勝寺は現在まで移転することなくその法灯をつないでいる。光明寺は時宗寺院として、妙勝寺は尾張日蓮宗の濫觴の地で坂東総本寺としてかつては大伽藍を誇っていた。さらに、『甚目寺町史』によると、千手堂は、中萱津の小字大坊がその跡であろうと伝えられており、大正の初年に大坊の土取場から古銭や灰などの出土があったとのことである。また、大御堂の跡は現在の実成寺であると伝えられている。これは、妙勝寺開祖白妙が、元応元年（1319）に寺を弟子日長に譲って、大御堂跡に隠居したが、その寺が今の実成寺となっているからであるとしている。また、長福寺は上萱津の小字隠居所の南の辺りにあったとする説が紹介されており、『甚目寺町史』では

妥当としている。そして、宝泉寺は下萱津に現存するが、1739年(元文4)に移転したとあり、旧地は不明である。「七ツ寺」の中で不明であった円聖寺は、富田荘絵図ではもっとも北に位置して描かれていることから、千手堂の想定位置よりも北に位置していた。また、現在鎌倉街道の推定路が萱津神社で五条川堤防と合流し中心集落からはずれることから、円聖寺は萱津神社周辺よりも南であったろうと思われる。すなわち、萱津神社から中萱津字大坊までの間にあったものと思われる。

以上を図としてまとめたものが図1である。鎌倉時代後半以降、萱津西岸の集落内の鎌倉街道沿いには最低限5ないし6つの寺院とその子院が軒をつらね、日蓮宗を中心とした宗教都市の姿をみせてきたと考えられる。

(4) 神社から見た中世萱津

以上のように、これらの文献・寺社からは「萱津」という地名が示す港湾都市という姿は見えてこない。

そこで、同様な存在として尾張国下津（稻沢市所在）に注目する。下津も港湾都市という姿は文献から見えてこない。だが、江戸時代の1841年(天保12)の村絵図を見ると、「住吉神社」が五条川の堤にまで広がる森とともに大きく描写され、鳥居前からまっすぐ伸びる通りには「住吉大門通り」と記載されるなど、この絵図中の「住吉神社」は下津における隔絶した地位をもつ神社として描かれているように見える。

また、絵図中には「住吉神社」の宮司と考えられる「権太夫」の屋敷が、「住吉神社」の西隣に一体となるかのように描写されている。「権太夫」は、絵図中に見える唯一の人名であり（絵図製作責任者である庄屋など2人を除く）、『蓬州旧勝録』（1779年（安永8）刊）でも「住吉神社」の「社人牧野権太夫」として宮司として唯一名前が見える。ここから近世後期には「住吉神社」の「権太夫」が下津の神社を牛耳る存在であったことがわかる。さらに「権太夫」は、備前検地以前に建設された五条川の堤上の富士塚を除地として有していると描写されており、この絵図中では個人が除地をもつ唯一の例となっている。ここから、「住吉神社」の宮司・「権太夫」は近世以前から下津における特権を継承してき

た有力者という姿が想像されよう。

以上から、「住吉神社」が下津にとって重要な存在であったことが窺われる。

そこで、「住吉神社」について考えたい。「住吉神社」は、摂津国の住吉大社から分祠された末社である。住吉大社が祀る住吉三神は古くから航海関係者や漁民の間で海上安全の神として信仰されてきた。内陸に位置する下津において「住吉神社」が分祀された背景には、五条川を通じて下津まで多くの海上輸送を行う船が入ってきたことを考えたい。下津で海を利用した輸送が重視されたからこそ、海上安全の神である「住吉神社」は下津で最も重要な神社とされ続けた。それが、海を利用した輸送と関係が無くなつた近世においても生き残ったと思われる。

さて、尾張国下津の事例を踏まえて、萱津を考える。下津において海を利用した輸送が盛んならば、当然、その下流に位置する萱津にはさらに多くの海上輸送を行う船が立ち寄つたであろう。尾張部における「住吉神社」の他の事例は、現在愛知県神社庁に登録される神社を見ると、半田市、名古屋市熱田区、豊明市に存在する。半田市の「住吉神社」は戦前まで「入水神社」と称されていた。また熱田区の「住吉社」は堀川沿いに所在する。どちらも水上交通との関係が想像される。そこで注目したいのが、時宗寺院として注目される光明寺の東隣にある「三島神社」である。「三島神社」は、伊予国大三島に所在する大山祇神社（もしくは萱津に鎌倉時代の守護所が置かれたことも考え合わせると伊豆国三嶋大社）から分祀された末社である。いずれにせよ、祭神の大山祇（積）神（おおやまづみのかみ）は、山の神であるとともに、海の神であり、古くから武家からの尊崇を受けてきた神でもある。しかし、現在愛知県神社庁に登録される神社を見ると、尾張部には他に一例しかない。（もう一例は稻沢市矢合町に所在。蛇足であるが、稻沢市矢合も三宅川を通じて海に

つながるともいえる。）「三島神社」は、「住吉神社」とともに尾張では稀有な神社であり、ともに海神である。神社の性格から見ると、萱津・下津は海に結びつく港湾都市であるといえる。以上から、海神である「三島神社」をもつ萱津の西岸集落にも海上輸送を行う船が多く入ってきたものと想像される。萱津に守護所が所在することを加味したうえで、航海安全を祈願するために、海神であり武家からの尊崇を受ける「三島神社」が萱津の西岸集落で祀られたものと思われる。その港の位置を特定することは難しいが、海神である「三島神社」から遠く離れた位置ではないことは想像できよう。

（5）小結

中世萱津は、蛇行する庄内川と五条川の合流点の両岸に設けられた集落であり、文献から西岸集落には日蓮宗や時宗などの寺社や海上輸送を行う船が入る港湾が、東岸集落（東宿）には茶屋などの歓楽施設や定期市が想定される。すなわち、中世萱津の両岸集落には都市としての性格に違いがあったと考えられる。このような性格の違いが、西岸集落のみが近世まで萱津として生き残り、東岸集落（東宿）は廃絶し小字名に名残を残すのみとなった背景となつたとも考えられよう。（加藤博紀）

地籍図の解析

「萱津」を分析するにあたり、これまでに明治17年作成の地籍図については愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会により図化された海部郡北東部と蔭山誠一により図化された現海部郡七宝町西部、加藤博紀により図化された海部郡甚目寺町、西春日井郡新川町、西枇杷島町の分析があり、今回は新たに現名古屋市北西部の地域について図化したものと加えて解析を行つた（図2）^(註1)。この海部郡北東部から名古屋市北西部の地籍図（図2）については、愛

註1：図化した地籍図名

堀越村、枇杷島村、枇杷島町、栄村、日比津村、上中村、下中村、稲葉地村、下小田井村、阿原村、小場塚新田村、助七新田村、寺野村、須ヶ口村、土器野新田村、西堀江村、中河原村、下河原村、東今宿村、西今宿村、上萱津村、中萱津村、下萱津村、森村、方領村、石作村、小路村、新居屋村、甚目寺村、本郷村、坂牧村、長牧村、八ツ屋村、北間島村、東條村、堀之越村、花常村、馬島村、中島村、西條村、鎌須賀村、砂子村、三本木村、万場村、千音寺村、新家村、沖之島村、遠島村、秋竹村、桂村、安松村、下田村、伊福村、川部村、鷹居村、下之森村、徳美村、鯰橋村

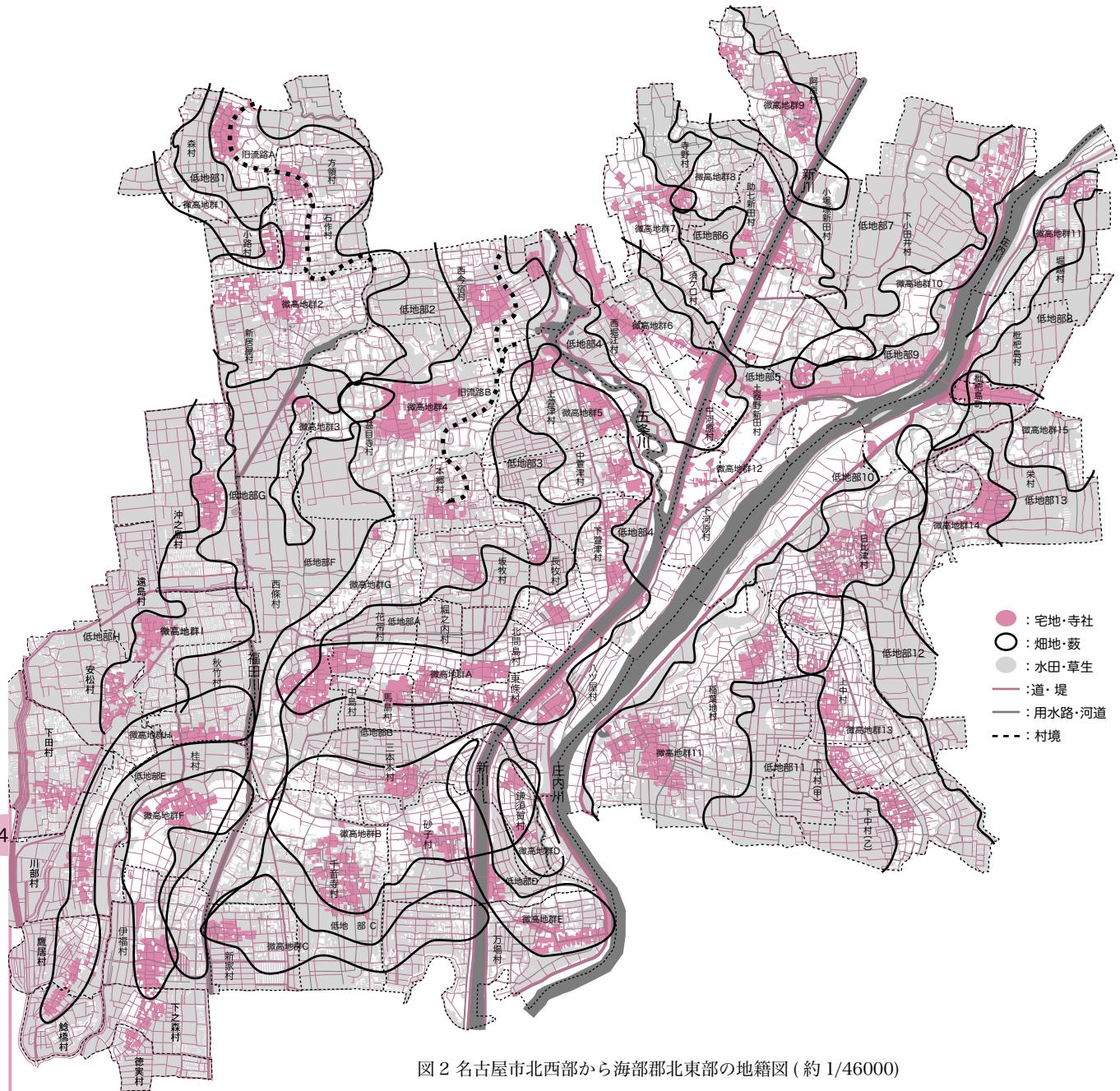


図2 名古屋市北西部から海部郡北東部の地籍図(約1/46000)

知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会（中・近世研究部会 2004）と蔭山誠一（蔭山 2005）により分類された宅地・畠地等の微高地群 9 箇所（微耕地群 A～微耕地群 I）と水田域等の低地部 7 箇所（低地部 A～低地部 G）、加藤博紀（加藤 2006）により分類された宅地・畠地等の微高地群 4 群（微高地群 1～微高地群 4）と微耕地群内にみられる帶状の水田域を旧河道として認識したものが 2 箇所（旧河道 A・旧河道 B）ある。今回はこれらの地形分類を尊重し、さらに海部郡甚目寺町、西春日井郡新川町、西枇杷島町については今回追加して合成した名古屋市北西部の地籍図を基に地形を細分し、また新たに

に分類した（微高地群 I ～ 微高地群 15 と低地部 I ～ 低地部 13）。よって図 1 の地域において宅地・畠地等の微高地群を 24 箇所（微高地群 A ～ 微高地群 I と微高地群 I ～ 微高地群 15）と微高地群に挟まれた水田域等の低地部 21 箇所（低地部 A ～ 低地部 G と低地部 1 ～ 低地部 13）を抽出した。ここでは今回分析の対象となる海部郡甚目寺町と西春日井郡新川町、西枇杷島町、名古屋市北西部の微高地群と低地部について現在に至る庄内川と五条川、及び他の河川の河道の変遷がさほど大きくはなかったと仮定した場合の旧庄内川により形成されたと考えられるもの、旧五条川により形成されたと考えられるも

の、その他の旧河川により形成されたと考えられたものに分けて述べる。なお、これまでの研究を追認するが、比較的大規模な河川は2つの並行する微高地群2箇所とその微高地群に挟まれた低地部1箇所をもって旧流路の痕跡とした。また小規模な河川は1箇所の微高地群の中に流路の痕跡と思われる水田域（低地部）を確認できる。

尚、明治17年作成の地籍図において、それ以前に形成された地形に加えて、江戸時代における新川掘削や美濃街道の整備等の開発に伴う大きな地形改変が認められる。中世以前に形成された地形と江戸時代の地形改変を完全に分別することは困難である為、明らかに江戸時代の地形改変が判明するものは地形の分類において考慮している。

（1）旧庄内川により形成された地形

旧庄内川により形成された地形として比較的大規模な河川によるものと思われる地形が3箇所、比較的小規模な河川によるものと思われる地形が3箇所みられる。

（A）比較的大規模な河川による地形

1つは微高地群10（庄内川右岸の下小田井村付近）と微高地群11（庄内川左岸の堀越村から枇杷島村、日比津村、稻葉地村に至る）に挟まれた低地部9（庄内川右岸の下小田井村付近）が抽出できる。加藤の「微高地群4」とほぼ同じである。2つ目は微高地群5の南部（下萱津村付近）から微高地群A、微高地群Hと微高地群Bから微高地群Fの2つの並行する微高地群とその5箇所の微高地群に挟まれた低地部4（下萱津村北東部）から低地部B、低地部Eに至る低地部が抽出できる。3つ目は微高地群Dと微高地群Eに挟まれた低地部Dが抽出できる。

（B）比較的小規模な河川による地形

庄内川左岸、名古屋市域において3箇所の地形がみられる。1つは微高地群15（枇杷島町から栄村北東部に至る地点）、2つ目は微高地群14（枇杷島村南西部から栄村と日比津村境付近を南下する地点）、3つ目は微高地群13（日比津村南西部から上中村を経て、下中村東部に至る地点）が抽出できる。これらは微高地群内部に旧河道と考えられる帶状にのびる水田域が

確認できる。低地部は微高地群11、微高地群13～微高地群15に挟まれた低地部11～低地部13があるが、微高地群13～微高地群15の内部には旧流路と考えられる水田域の窪地が推定できる為、低地部11～低地部13は微高地群13～微高地群15の形成に伴う流路の低地部と考えるより後背湿地的性格が強いものと考えられる。

（2）旧五条川により形成された地形

地籍図中央部にある旧五条川により形成された地形として比較的大規模な河川によるものと思われる地形が1箇所、比較的小規模な河川によるものと思われる地形が1箇所みられる。

（A）比較的大規模な河川による地形

現在の五条川の河道に近い地形で、微耕地群5（五条川右岸の地域で上萱津村から中萱津村を経て下萱津村に至る微高地群、北は微高地群4北部と南は東西にのびる微耕地群A東部へと連続する）と微耕地群6（五条川左岸の地域で須ヶ口村西部と西堀江村東部から土器野新田村西部と中河原村にいたる地点で微耕地群12と接する）とその2箇所の並行する微高地群に挟まれた低地部4（五条川流路付近）が抽出できる。加藤の「微高地群3」の南西側の地形である。

（B）比較的小規模な河川による地形

現在の五条川から南西にのびる地形で微高地群4（北は西今宿村から甚目寺村を経て本郷村に至る地点で、南は大治町域から福田川付近にみられる微高地群Gに連続する）が抽出できる。地籍図上に表現した「旧流路B」の地点に水田域の帶状窪地がのびる。旧庄内川系の地形である微耕地群A・B・F・Hと低地部B・Eより切り合い関係において新しい。加藤の「微高地群2」とほぼ同じである。

（3）その他の旧河川により形成された地形

（A）旧福田川により形成された地形

現在の福田川の流路付近に存在するもので、微高地群が3箇所と低地部が4箇所ある。微高地群は西から微耕地群1（森村北西部から西に振り、再び東に振り小路村に至る微耕地群、小路村で微高地群2と合流する）と微高地群2（森村中央部から法領村、石作村西部を経て新居屋村北部に至る微高地群で南東端は甚目寺村北西部に至る、甚目寺村北西部の微高地群4を経て

微高地群3につながる可能性と南西部が沖之島村の微高地群Iにつながる可能性がある)、微高地群3(甚目寺村と新居屋村の村境を経て西條村北部に至る微高地群、甚目寺村にて微高地群4から西に分かれたもの)がある。低地部では微高地群1と微高地群2に挟まれた低地部1、微高地群2と微高地群4に挟まれた低地部2、微高地群Iと微高地群3に挟まれた低地部G、微高地群3と微高地群4・微高地群Gに挟まれた低地部Fがある。これらの低地部は微高地群1～微高地群4の形成とあまり関係がないように考えられる為、微高地群の後背湿地的性格が推定できる地形である。この中で低地部1は微高地群1と微高地群2に挟まれた一つの旧河道として認識できる可能性もあるが、微高地群2には加藤の指摘した旧河道と考えられる帶状窪地の水田域「旧流路A」があり、また微高地群1は弥生時代中期の遺跡である森南遺跡が立地する微高地であるため形成時期が異なる可能性がある為、一つの旧河道と分類しない。

(B) 庄内川と五条川に挟まれた地域の地形

先に述べた地籍図による旧庄内川により形成された地形と旧五条川により形成された地形に挟まれた微高地群4箇所と低地部3箇所がある。微高地群は西から微耕地群7(寺野村北西部から須ヶ口を経て、下小田井村西部に至る微耕地群、下小田井村で微高地群10と合流する)と微高地群8(寺野村中央部から助七新田村中央部を経て、須ヶ口村東部と小場塚新田村半西部に至る微高地群で、寺野村で微高地群7と一部重なり、須ヶ口村東部にて微高地群7につながる)、微高地群9(阿原村西部から小場塚新田村北部に至る微高地群)があり、低地部は微高地群6と微高地群7に挟まれた低地部5、微高地群7と微高地群8に挟まれた低地部6、微高地群8と微高地群9、微高地群10に挟まれた低地部7がある。これらの低地部は微高地群7～微高地群9の形成と関係がある可能性もあるが、地籍図北東部の分析ができない為、今はその評価ができない。ただし、低地部7の下小田井村北西部は微高地群10の形成と関係のある旧庄内川の後背湿地的性格が推定できる地形である。また各微高地群の中に旧河道と考えられる水田域も確認できない。

残り1つの地形は微高地群12で、五条川と新川の合流する地点から東側の現庄内川の両岸の土器野新田村南部から下河原村、下萱津村南東端部の地域において畠地が広く展開する地形がある。

(4) 五条川付近の地籍図の解析(図3)

中世の五条川の流れとその西岸の状況を考えるために、旧五条川により形成された地形と考えられる微高地群4～微高地群6にみられる西今宿村・上萱津村・中萱津村・下萱津村・須ヶ口村・西堀江村・土器野新田村・中川原村の地籍図を分析する。

微高地群4を微高地4a～微高地4lに、微高地群5を微高地5a～微高地5wに、微高地群6を微高地6a～微高地6jに細分した。

(A) 旧五条川の流れ

微高地を詳細に見ると、微高地群4・5と微高地群6の間にある低地部4が現在の五条川の流路に沿うように西今宿村の微高地4cから上萱津村の微高地5dにかけて西に張り出すように広がり(微高地が西に凹む)、上萱津村の微高地5d・5eから下萱津村の微高地5mにかけて微高地が東に張り出し、対岸の微高地6iがやや東に凹んで低地部4がその部分に張り出す状況が窺える。また、下萱津村の微高地5mから微高地5sにかけて微高地が大きく西に凹み、低地部4が広がる。微高地5uから微高地5wにかけて微高地は再び膨らんで広がり、先に述べた旧庄内川により形成された地形に続く。したがって、旧五条川と旧庄内川は現在の新川と五条川の合流地点の北東約300m前後の地点となる。

尚、旧五条川により形成された地形とした微高地群4は先に述べたように、『富田荘絵図』にある河川の表現より新しい地形と考えられる。

(B) 旧五条川の西岸-『富田荘絵図』との関係-

上萱津村微高地5d・5eの北側、微高地5eと微高地5gの間、微高地5gから微高地5i・5mの北側が微高地5j・5kを含みつつも西に凹み、低地部が西に張り出す。この部分は道ア(鎌倉街道)もやや西に振る。

したがって『富田荘絵図』との対応関係(図4)は微高地5e南側と微高地5g、微高地5m

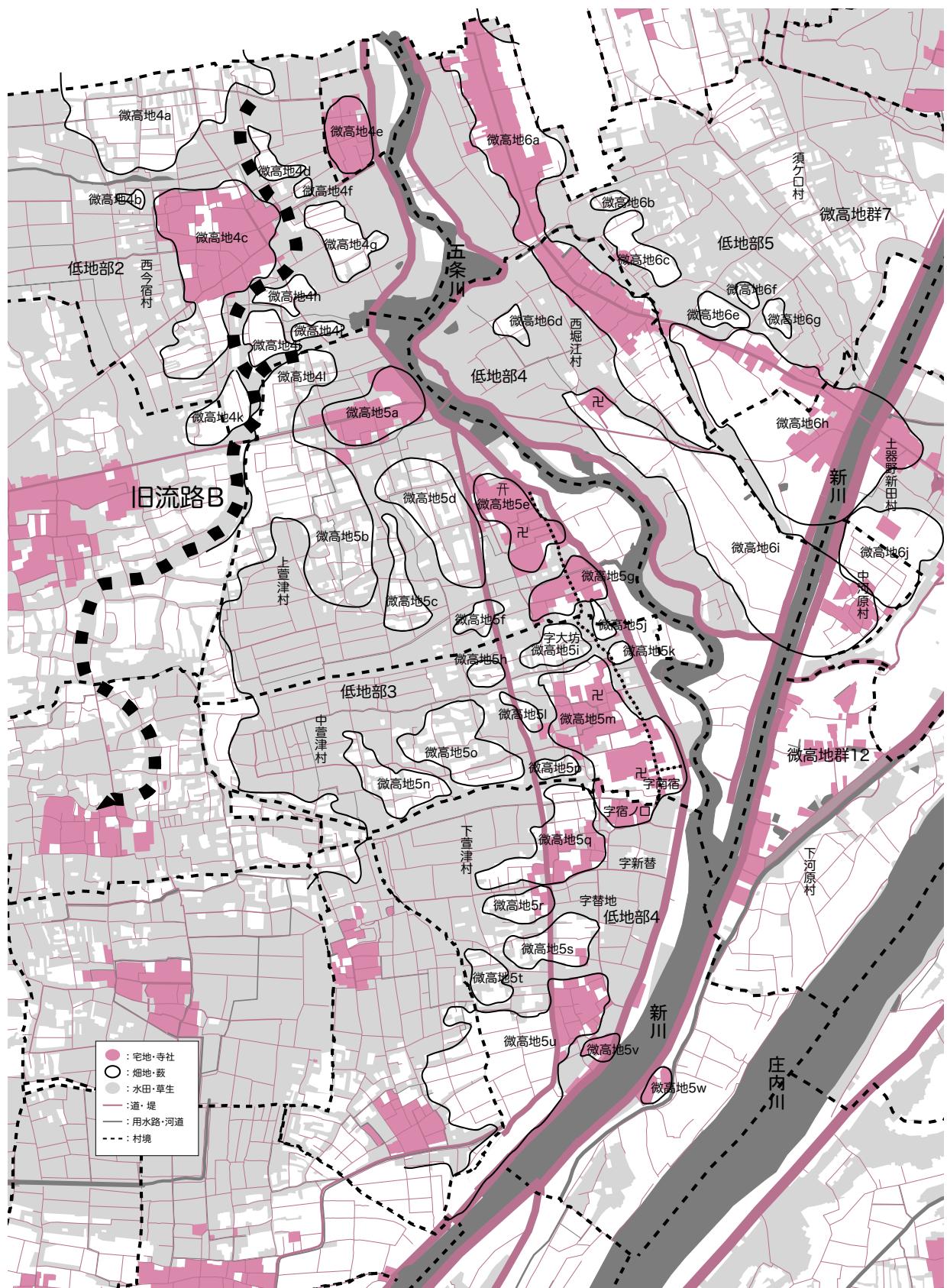


図3 五条川両岸の地籍図(1/15000)

の南側が道ア（鎌倉街道）の東西に微高地がのびている点から、微高地 5e 南側と微高地 5g が「円聖寺」・「富田」の部分に、微高地 5g が「千手堂」・「富田庄内」の部分に、微高地 5m 南側が「大御堂」・「富田」と二本線の道である道チの部分に推定できる（道チは加藤による指摘の推定地と同じ）。また微高地 5i と微高地 5m 北側が道ア（鎌倉街道）の東にのびていない点と微高地の分布から「光明寺」の部分に推定できる。そしてその鎌倉街道を挟んだ両側の地点が「萱津宿」に相当するだろう。

（5）庄内川左岸の地籍図の解析（図5）

中世の庄内川の流れとその左岸の状況を考えるために、旧庄内川により形成された地形と考えられる微高地群 11 南部と微高地群 13 がみられる日比津村南西部・稻葉地村・上中村西部・下中村（甲・乙）西部の地籍図を分析する。

微高地群 11 を微高地 11a～微高地 11z に、微高地群 13 を微高地 13a～微高地 13w に細分した。

（A）旧庄内川の流れとその変遷

まず旧庄内川の流れは、現在の庄内川の河川敷を含む微高地群 12 付近と微高地群 11 の間にある低地部 10 が現在の庄内川の流路に沿うようになり、その部分を旧庄内川が流れているものと想定できる。そして図5においては日比津村の微高地 11d から稻葉地村の微高地 11t にかけて南東に張り出るように低地部 10 が3箇所広がる（微高地が東に凹む）。その地点は北側から①日比津村の微高地 11a～微高地 11c を含みつつも微高地 11d～微高地 11g が南東側に凹み、微高地 11i の部分が西に膨らむ日比津村南西側の地点、②微高地 11j・微高地 11l を含みつつも日比津村の微高地 11i の西側から稻葉地村の微高地 11k～微高地 11n・微高地 11p 東側にかけて凹み、微高地 11p 北側に膨らむ稻葉地村北側の地点、③稻葉地村の微高地 11o を含みつつも微高地 11p 西側から微高地 11t～微高地 11u にかけて凹み、微高地 11s・微高地 11v・微高地 11x が北西に張り出す稻葉地村西側である。これらは稻葉地村の微高地 11p の北西の続きが字名に残る「古堤新田」の古堤に想定される地点であることからも旧庄内川の川岸であった地点で、旧庄内川の攻撃面に当たるも

のと考えられる。地形の傾斜と先に分析した五条川右岸の状況から、旧河道の流れが想定できるのは日比津村南西側の地点から下萱津村東側の地点へ、そして再び稻葉地村西側の地点と向かう流れが想定され、現在の稻葉地村西側に大きく膨らむ流れにつながるものが推定される。しかし稻葉地村北側の地点にも旧川岸と考えられる古堤跡と推定できる地籍図上の微高地があり、その南東側に当たる微高地 11k～微高地 11n 付近の間の窪地から上中村、下中村に続く旧河道の痕跡と考えられる旧流路 C が帶状窪地の水田域として認められる。旧流路 C は明らかに微高地群 13 を形成した旧庄内川から流れる河川である。

次に旧庄内川の変遷を考える。先に指摘した旧庄内川の川岸と考えられる地点には中世から江戸時代前期にかけて時間的な変遷が存在し、旧庄内川右岸に想定される下萱津村東側の地点も旧河道が微高地を浸食していった最後の過程（痕跡）を示している可能性が高い。庄内川両岸の微高地には遺跡が確認されているが、庄内川左岸では日比津村南西側地点においてその南側に接して戦国期の日比津城跡、稻葉地村北側地点の南側に接して中世の東宿跡（微高地 11n・11m 付近）、稻葉地村西側地点の微高地の張り出す地点（微高地 11s）に戦国期の稻葉地城跡があり、庄内川右岸では下萱津村南部の微高地 5v 付近に旧庄内川の渡し場が最後にあつた伝承が残されていることから、比較的旧河道の流れが想定しやすい部分に比較的新しい時期の史跡や伝承が存在するのも旧河道の流れの変遷を示唆しているようである。また地籍図の解析において先に述べた微高地群 13 の中に認められる旧流路 C のような帶状窪地となる水田域は、これまでにも地籍図の西側に見られる微高地群 4・微高地群 G のように 14 世紀中頃の作成と考えられる『富田荘絵図』にみられる河道ウのように比較的新しい切り合い関係にある 15 世紀～16 世紀頃と推定されるものがあることから、比較的新しい時期のものである可能性がある。したがって旧庄内川の流れが単純な一筋の流れでない可能性はあるが、庄内川左岸において旧庄内川の川岸と認められる 3 箇所の地点はいずれも比較的新しい時期のものを含む最

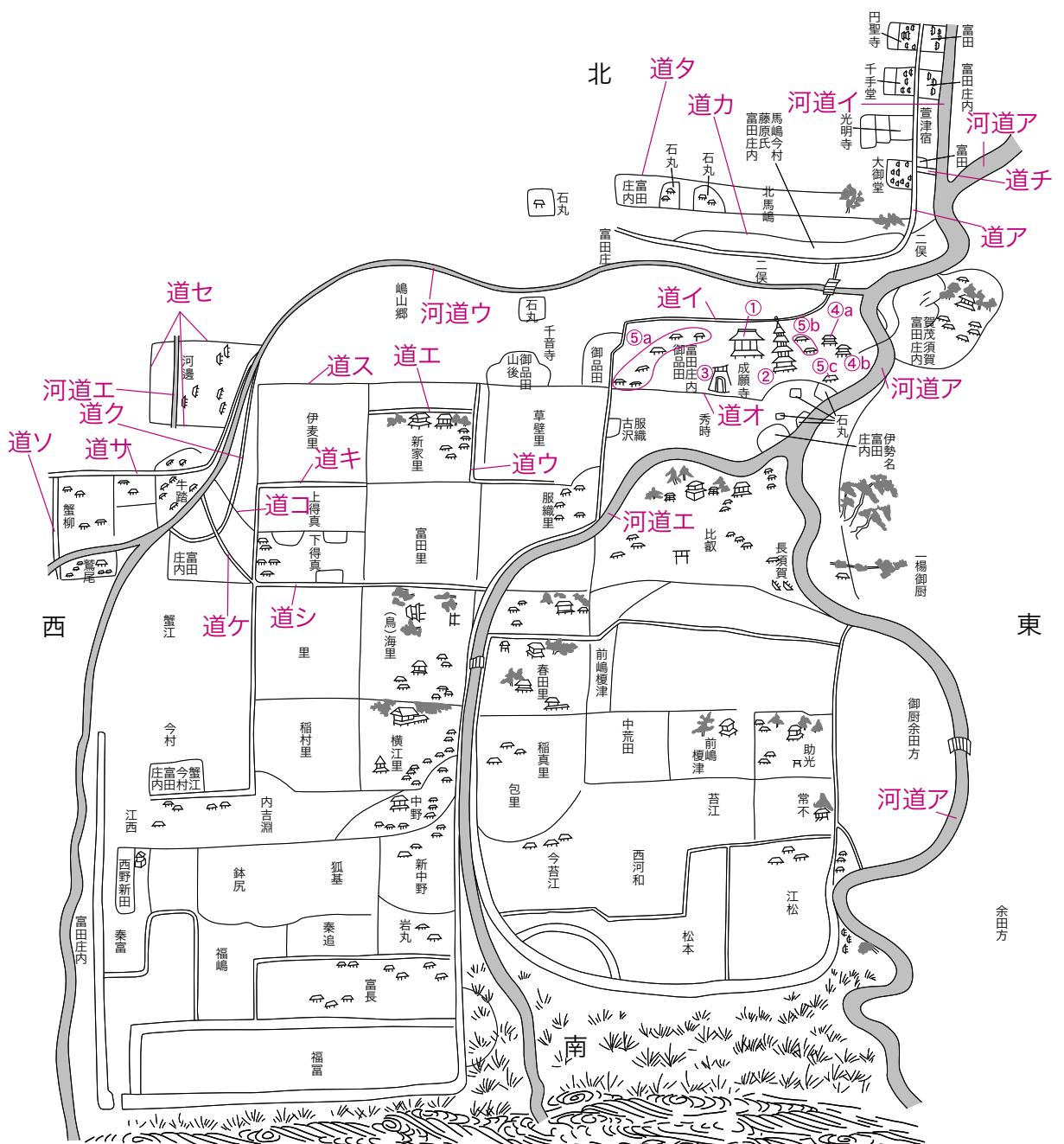


図4 尾張国富田莊絵図のトレース図(赤字は本文記載の仮の名称で、中・近世研究部会2004に加筆修正

後の過程を示すものと考えられる。

(B) 旧庄内川の左岸 - 『富田荘絵図』との関係 -

旧庄内川左岸の地域において『富田莊絵図』との対応関係が考えられる部分は、旧庄内川と考えられる河道アの東岸に描かれた「富田庄内賀茂須賀」の地点がある(図4)。この地点は河道アが旧五条川と考えられる河道イと合流して東に流れが振った後、再び西に流れが張り出して河道アから河道ウが西に分流する地点の間にある。これまでの分析により河道アから河道ウが西に分流する地点は八ツ屋村南西部の地点

と想定されており、先に述べた旧庄内川である河道アと旧五条川である河道イの合流地点が下河原村北部の地点に推定されることから、河道アの流れが東に振る地点が特定できれば、「富田庄内賀茂須賀」の地点が特定できる。旧庄内川と旧五条川の合流地点の対岸である旧庄内川の左岸において、流れの痕跡がみられる地点は先に分析した3地点があるが、一番北西側にある日比津村南西側の地点は旧庄内川と旧五条川の合流地点の東南東の地点にあり、流れの復元が難しい。よって河道アの流れが東に振る地

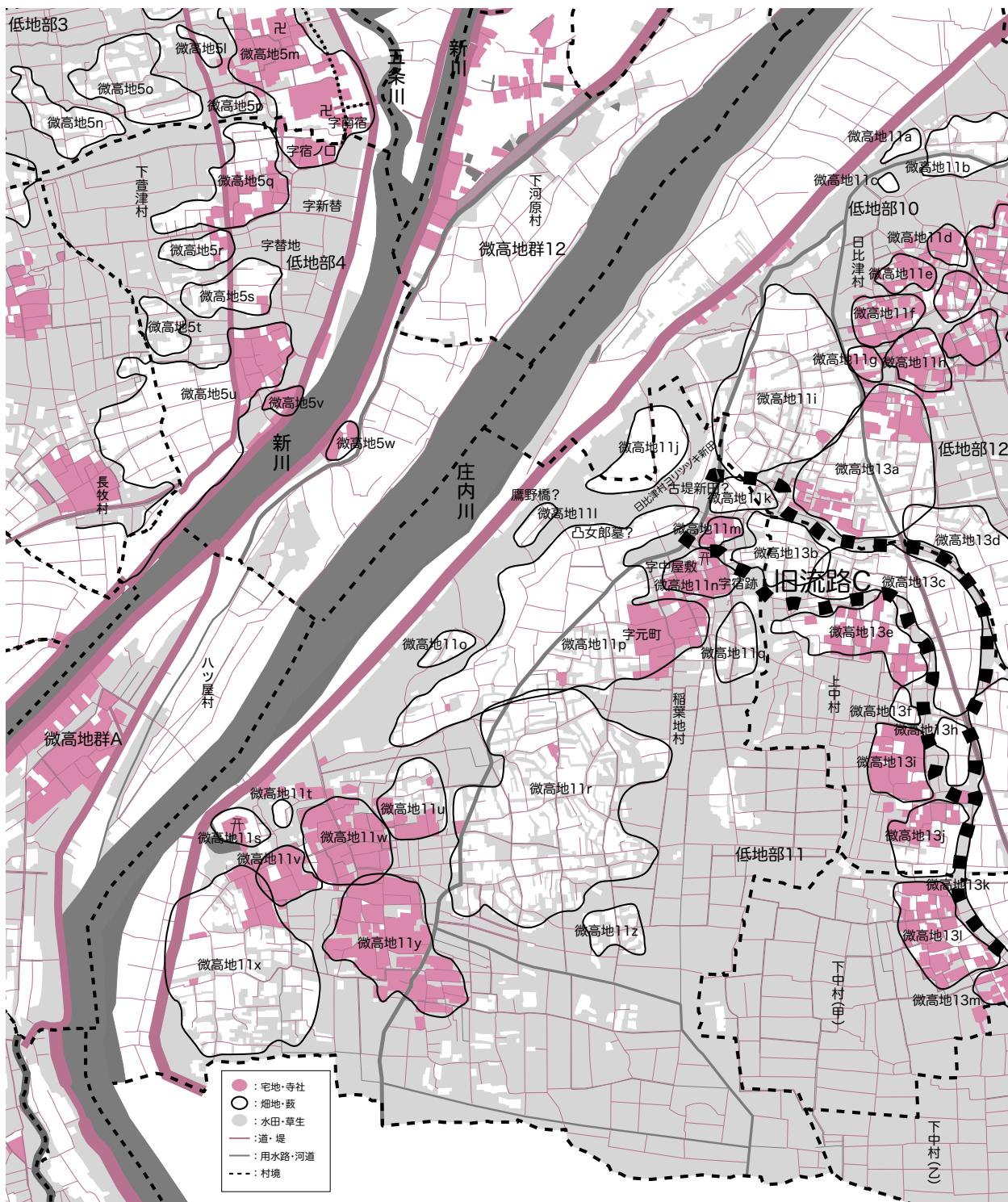


図5 庄内川左岸の地籍図 (1/15000)

点は稲葉地村北側の地点か稲葉地村南西側の地点に近い部分と考えられ、河道アと河道ウの分流地点との位置関係から、「富田庄内賀茂須賀」の地点は稲葉地村南西側にある微高地 11s～微高地 11y の地点の可能性が高い。このように考えると「富田庄内賀茂須賀」の地点に描かれた楼閣風の2階建ての建物とマツの樹木表現が微高地 11w 付近の地点に、その下に描かれた小

型の5棟の建物表現が微高地 11y 付近の地点に、そして「富田庄内賀茂須賀」の地点の西側に描かれた2つの砂山の表現が微高地 11x 付近の地点に想定できる。したがって「富田庄内賀茂須賀」として一本の線により選択された範囲は稲葉地村南西側の微高地 11s～微高地 11y 周辺から稲葉地村の南にある岩塚村北部の地点と特定できる。(蔭山誠一)

現在の表層地形解析

(1) 方法

愛知県海部郡甚目寺町萱津周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。等高線図の作成には「名古屋市都市計画基本図(1/2,500)」、「西枇杷島町都市計画図(1/2,500)」、「新川町都市計画図(1/2,500)」、「甚目寺町都市計画基本図(1/2,500)」にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した。等高線図上には五条川流域の主要な神社・寺院をプロットした。

(2) 表層地形の解析結果

東西約3.3km、南北約4.0kmの範囲において、等高線間隔0.2mで標高0.8mから標高6.6mまでの等高線が描けた。さらに解析範囲全体の相対的な地形の高低差を読み取りやすくするため、等高線間隔0.4mで標高1.0mから標高3.0mまでを5区分、標高1.0mよりも低いところと標高3.0mよりも高いところを加えて全体で7区分し、図示した(図6)。

解析範囲全体では北側(新川町・甚目寺町北部)と北東側(西枇杷島町)で相対的に標高が高く、南側(名古屋市中村区)と南西側(大治町・甚目寺町南部)に向かうにしたがって次第に低くなる。相対的に標高が高いところを列記すれば、解析範囲の北および北東側に広がり、東は庄内川、西は五条川により境される西枇杷島町、新川町、清洲町にまたがる地域には標高2.6m以上の高いところがみられる。また、庄内川に沿う右岸と左岸の全域では標高2.8mから標高6.6mまでと、その周辺の標高値と比べても極めて高く、標高6.6mは解析範囲全体における最大標高値である。解析範囲の北西、五条川右岸沿いの甚目寺町西今宿の西側にも標高2.6m以上地域がみられる。また、五条川の右岸側(西側)に沿って標高1.8m～2.6mまでの比較的高い地域が連続している。

いっぽう、相対的に低いところでは、庄内川の左岸側(南東部)、名古屋市中村区の鳥居通から靖国町、稻上町にいたる東西約1.8km、南北約0.9kmの範囲は標高1.8m以下を示し、相対的に低くなっている。解析範囲の西側、甚

目寺町下萱津、大治町長牧の東西距離およそ1.4kmの範囲には、標高1.8m以下の地域が広がっている。これら相対的に低い2地域がひろがる範囲は、ちょうど名古屋甚目寺線と甚目寺佐織線の南側にあたっている。また、解析範囲の中央部付近、五条川右岸(西側)の甚目寺町中萱津と同町上萱津にかけての標高1.0m～1.8mには、東西約0.5km、南北約7.5kmの相対的に低い閉曲線部分がみられる。

(3) 地形解析結果からわかること

地形解析の結果から推定できる地形の特徴を挙げる。まず、庄内川の流路に沿う右岸と左岸の全域では標高2.8mから標高6.6mまでと、その周辺の標高値と比べて極めて高かった。これは、明らかに人工的に改変されたものである。解析範囲の北および北東側で、西枇杷島町・新川町・清洲町にまたがる広い地域では標高2.6m以上の高いところがみられ、特に名鉄名古屋本線の南に沿う西枇杷島町上河原から新川町萩野を通り、清洲町丸の内付近までは標高3.0mよりも高く、東から北西方向へ帯状に高くなっていることがわかる。また、五条川の右岸(西側)沿いに見られる神社および寺院は、およそ標高2.2m～2.6mの範囲内にプロットされる。このことは、少なくとも標高2.2m～2.6m付近が人為活動を行うのに適した場所であった可能性を指摘できる。

いっぽう、相対的に低いところは、庄内川左岸の名古屋市中村区の南部一帯と、五条川よりも西および南西側で確認できる。名古屋市中村区側で描かれる各等高線の屈曲率は低く、それぞれが比較的滑らかに結ばれるのに対して、五条川右岸(西側)の一帯でみられる等高線の屈曲率は高く、複雑に結ばれる。この相違は人工的な土地改変の程度を現わしているものと思われ、地形の高低差が少なくなるような土地改変の程度が大きいほど等高線は滑らかに、高低差が大きいほどそれは複雑になる。つまり、より複雑な五条川右岸(西側)の方が名古屋市側に比べて土地改変が進んでいないものと推定できる。そのような見方からすると、解析範囲の中央部付近、五条川右岸(西側)の甚目寺町中萱津と同町上萱津にかけての標高1.0m～1.8mにみられた閉曲線は、現在の五条川流路のすぐ

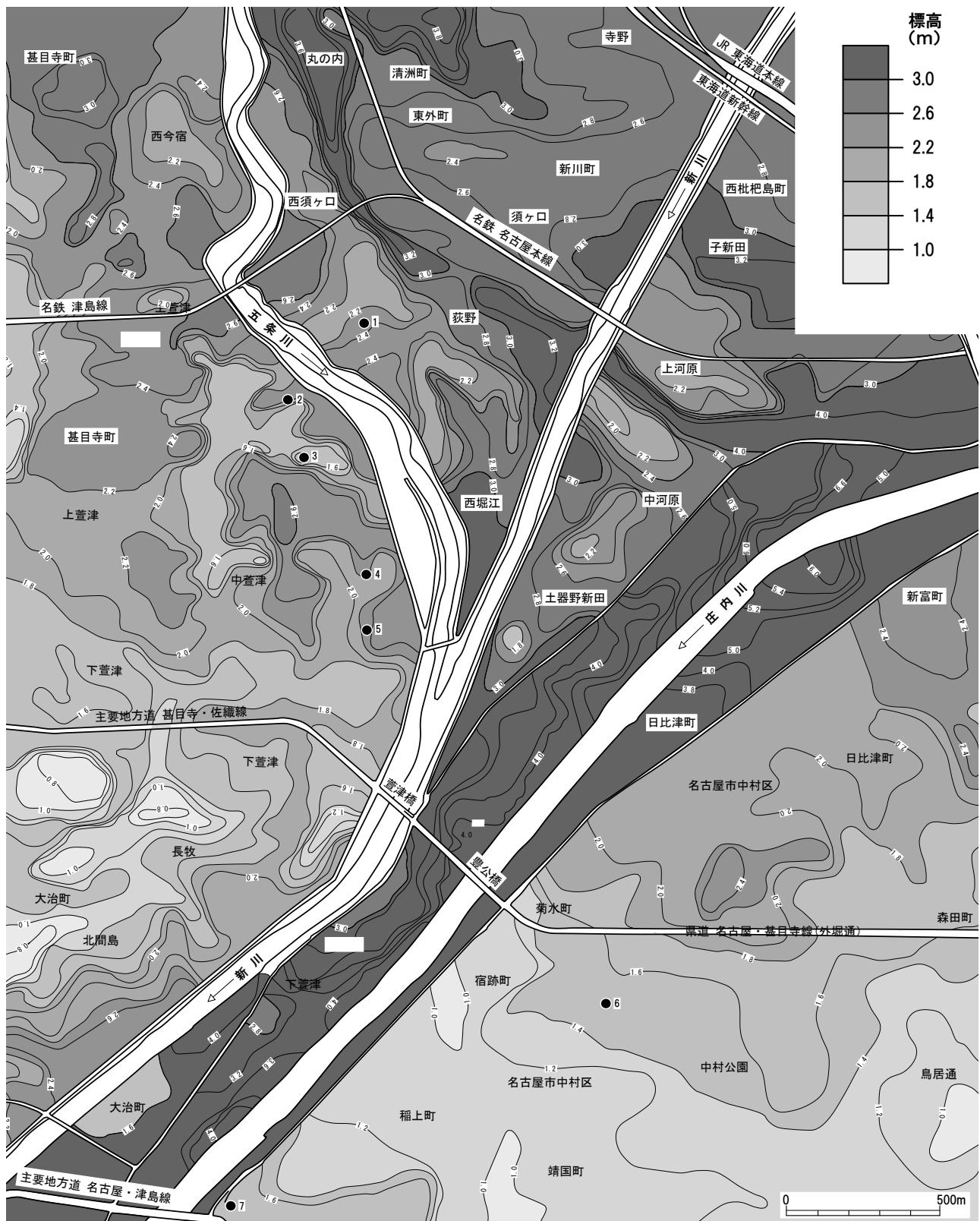


図6 愛知県海部郡甚目寺町周辺の等高線図(都市計画図(1/2500)を基に鬼頭が作成。)

● は神社・寺院を示す。

1. 長谷院、2. 萱津神社、3. 妙勝寺、4. 光明寺、5. 実成寺、6. 明神社、7. 凌雲寺

南にあたる位置と閉曲線で囲まれるというその形態から、五条川のかつての流路跡である可能性がある。特に萱津神社の南には現在でも池があり、この池が流路跡に通じる止水域の名残であると捉えることも可能である。

(4) 表層地形と地籍図解析結果との比較

現在の地形解析の結果と地籍図を基に推定された微高地群および低地部との対比を行った。結論から先に述べれば、現在の地形の高低差と地籍図の微高地あるいは低地部とは、完全ではないにしろ比較的一致した。例えば、甚目寺町北部の西今宿西側でみられた標高2.6m以上の地域や、五条川の右岸側に沿って連続した標高1.8m～2.6mまでの地域は、地籍図の微高地群4と微高地群5の各微高地を含んでいる。また、地形解析範囲の北および北東側の西枇杷島町・新川町・清洲町にまたがる広い範囲で確認された標高2.6m以上の高いところは、微高地群6に対応している。

対して、甚目寺町中萱津と同町上萱津にかけての標高1.0m～1.8mでみられた閉曲線で囲まれる部分や、甚目寺町南部の標高1.8m以下の地域は低地部3と低地部4に対応している。

ここで、地籍図はあくまでも土地の利用状況を平面上に図示したものであり、その図は基本的に地形の高低差そのものを表わしていないことである。宅地や社寺が相対的に高いところに、水田などが低いところで営まれるという我々の経験的な事柄に照らし合わせて、分析者が任意に結んだ範囲を土地の高低差に読み換えているに過ぎないのである。要するに、地籍図は土地の利用を現わしそすれ、決して定量的な地形の高低差を現わしていないことに注意を払わなければならない。また、地籍図は明治17年(1884年)の地図であり、現在よりも百数十年前のデータである。その間に生じたであろう人工的あるいは自然の地形改変を考えると、現在の表層地形と地籍図のデータとが完全に一致することは考えられない。ところが、今回、現在の表層地形と地籍図から推定された微高地群と低地部とが比較的よく対応した。先に、五条川右岸(西側)は土地改変の影響が少ない可能性を指摘したが、地籍図の微高地群と低地部の区分結果と現在の地形とに少なからず対応関係がみられる

事実は、甚目寺町萱津周辺域に歴史的な原地形が残っていることを示唆するものである。(鬼頭剛)

中世萱津に関する考古学的調査

(1) これまでの成果と今回の調査の方法

次に考古学的な調査の概要について報告する。

今回分析の対象とした地域(名古屋市中村区と海部郡甚目寺町)でこれまでに確認された周知の遺跡は『愛知県遺跡分布地図』によると、名古屋市中村区域で7ヶ所、海部郡甚目寺町域で8ヶ所が存在する。具体的には、名古屋市中村区では集落遺跡(日比津西遺跡・東宿A遺跡・東宿B遺跡・宿跡遺跡・稻葉地東遺跡)と城館遺跡(日比津城跡・稻葉地城跡)があり、平安時代から戦国時代の遺物が採取されているといふ。一方、海部郡甚目寺町では、萱津周辺では古代寺院の清林寺遺跡がある他は、全て中世と推定される塚跡8ヶ所(金山塚・銭神塚・八剣塚・白髭塚・反魂香塚・無明塚・一里塚・山伏塚)が登録されているのみであった。しかも、これらの遺跡ではこれまでに発掘調査が行われたことはなく、その様相は全く不明であるといわざるを得ない。特に甚目寺町域では、塚跡のみが認識されているに過ぎず、集落遺跡の存在すら確認されていない状態であった。

そこで、萱津を巡る地域で港湾遺跡や集落遺跡の存在を明らかにするために、現地踏査を実施した。中世萱津に関連する可能性がある地域を平成18年11月～平成19年2月の期間に合計8回のべ17人が実地踏査した。踏査した地点は、海部郡甚目寺町大字上萱津・中萱津・下萱津・長牧、名古屋市中村区諏訪町・菊水町・宿跡町・東宿町・草薙町・稻上町・城屋敷町、西春日井郡新川町西堀江・土器野・中河原・下河原であり、各地点を何度かに分けて踏査した。主に現在の道路に面した畠地や空き地など土壤が露出した部分を中心に遺物を採集したので、必ずしも上述の区域を網羅的に踏査したものとはいえないが、およそその傾向を知ることができよう。その結果、図7にみられる20ヶ所において古代～中世にかけての遺物を採集した

表1 表採遺物の一覧

地點	住所	地点詳細	採集遺物		図番号
			中世	その他・不明	
1	甚目寺町大字上萱津字上野	妙勝寺本堂西	尾張型山茶碗2点	近世陶器1点	1・2
2	甚目寺町大字上萱津字上野	妙勝寺本堂南	古瀬戸卸皿1点・中国青花皿1点	土師器片1点	3・4
3	甚目寺町大字上萱津字左渡	妙勝寺南東畑	東濃型山茶碗2点		5
4	甚目寺町大字中萱津字定段寺	光明寺西畑	東濃型山茶碗1点		6
5	甚目寺町大字中萱津字道場	光明寺東門外	東濃型山茶碗1点・尾張型片口鉢2点	近世陶器?2点	7
6	甚目寺町大字下萱津字宿ノ口	実成寺南東畑	東濃型小皿1点・尾張型山茶碗3点・古瀬戸天目茶碗1点・土師器皿3点	須恵器長頸瓶1点	8・9・10
7	甚目寺町大字下萱津字宿ノ口	萱津保育園南	東濃型山茶碗1点		11
8	甚目寺町大字下萱津字新替	実成寺南東畑	尾張型山茶碗4点・尾張型片口鉢2点	土師器片1点・常滑片1点	12
9	甚目寺町大字下萱津字長者	八幡社南畑	東濃型山茶碗1点		13
10	甚目寺町大字下萱津字池端	八王子神社内	尾張型山茶碗1点		14
11	甚目寺町大字下萱津字坪井	萱津用水西	瀬戸大窯重圓皿1点	近世陶器1点	15
12	甚目寺町大字下萱津字蓮池	三社宮神社西	東濃型山茶碗1点		16
13	甚目寺町大字下萱津字十三石	豊公橋南西畑	東濃型山茶碗1点・瀬戸大窯仏龕具1点	近世陶器?1点	17・18
14	甚目寺町大字下萱津字九石	豊公橋南西畑	東濃型山茶碗2点		-
15	名古屋市中村区宿跡町1丁目	交差点南畑	東濃型山茶碗1点		19
16	名古屋市中村区東宿町3丁目	交差点南西畑	東濃型山茶碗2点		20
17	名古屋市中村区草薙町3丁目	稲葉地小北畑	尾張型山茶碗2点		-
18	名古屋市中村区稻上町2丁目	スーパー西	尾張型山茶碗1点		21
19	名古屋市中村区稻上町2丁目	城屋敷町境	尾張型山茶碗1点・東濃型山茶碗1点		-
20	新川町西堀江大腸	ポンプ場北	東濃型山茶碗1点		-

(表1)。また、5ヶ所で五輪塔や宝篋印塔などの石塔類の存在も確認できた。なお、遺物を多く採集できる地点では、その全てを採集せず代表的な資料(1～数点)のみを確保しあおよその傾向を知ることができる程度に止めた。

(2) 表採資料の紹介

現地踏査により中世以前の遺物が採集できた地点は20ヶ所であるが、これらは地域に大きな偏りがあることが分かる。踏査者の印象でこれらを分類すれば、次のようになる。

- 1) 1回の踏査で数点の遺物が採集できるという遺物が濃密に採集される地点は、海部郡甚目寺町大字上萱津字上野周辺、同中萱津字道場周辺、同下萱津字南宿～宿ノ口～新替周辺である。
- 2) 少なくとも1点以上の遺物を採集することができた遺物散布地点は、上記以外の海部郡甚目寺町大字上萱津・中萱津・下萱津地域、名古屋市中村区宿跡町・東宿町・草薙町・稻上町・城屋敷町、および清須市西堀江字大闕周辺である。

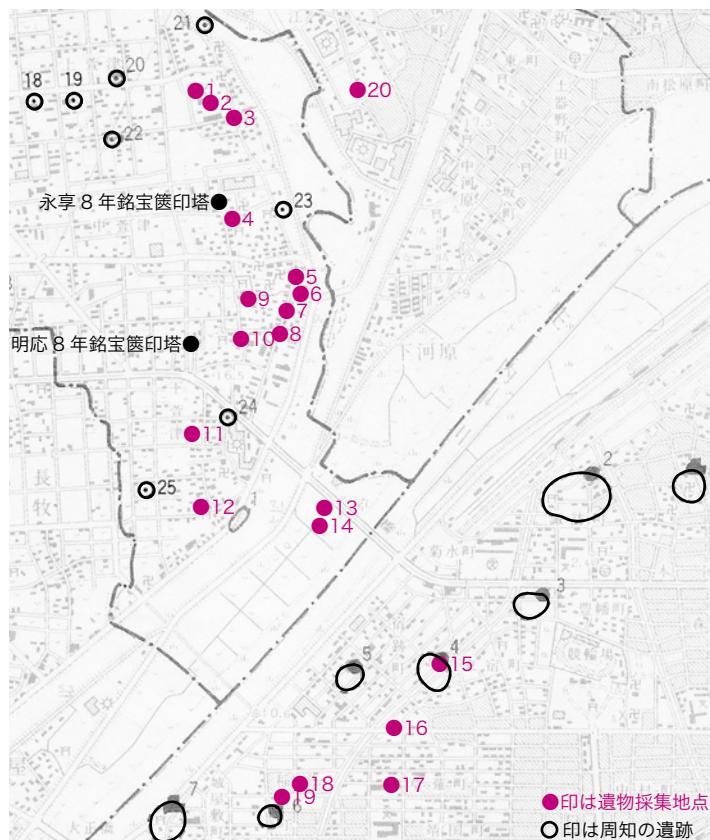


図7 中世の遺物表採地点

3) 今回の踏査では全く採集できなかった地点は、海部郡甚目寺町大字長牧、名古屋市中村区諫訪町・菊水町、字大闕を除く西春日井郡新川町西堀江・土器野・中河原・下河原の各地区である。現庄内川河川敷部分では、現豊公橋南西部の海部郡甚目寺町大字下萱津字六石付近で遺物を採集できたが、他の地点では中世以前の遺物は採集できなかった。

上記の結果からみて、五条川右岸の自然堤防上に遺物が濃密に分布し、庄内川左岸にも一定量の遺物が分布するのに対して、五条川と庄内川に挟まれた旧新川町域では全く遺物が採集されないと要約できよう。

次に採集された資料を紹介する(表1・図8)。ただし、採集資料は多くが小片であるため実測可能な資料は少なく、時期を詳細に決定することも難しいものがある。

- A) 甚目寺町大字上萱津字上野周辺(地点1～地点3)：13世紀中頃と思われる尾張型山茶碗(1・2)から15世紀代と思われる古瀬戸卸皿(4)

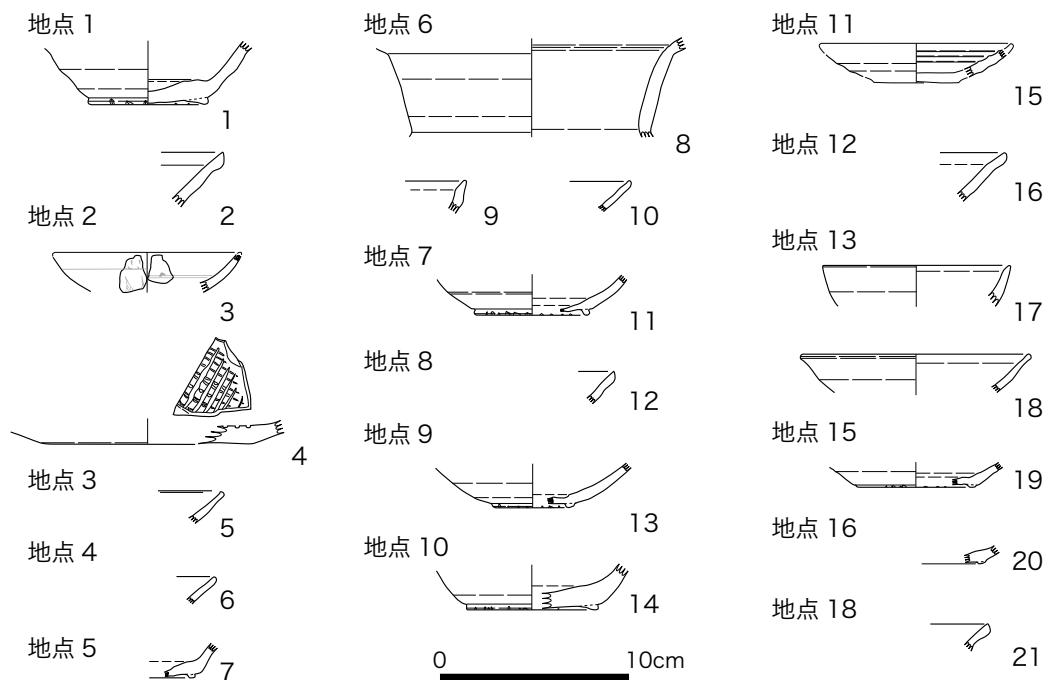


図8 表採遺物実測図(1/4)

と中国産青花碁笥底皿（5）がある。東濃型山茶碗も採集されており、13世紀から15世紀まで継続して遺物が存在すると評価できる。

B) 甚目寺町中萱津字道場周辺（地点4・地点5）：13世紀後半～14世紀頃と思われる東濃型山茶碗（6・7）があり、尾張型片口鉢片も採集されている。光明寺境内には複数の宝篋印塔が存在しており、うち1点には永享8年（1436）の紀年銘資料が存在している。今回の踏査では15世紀代と思われる陶磁器・土器類を採集できなかつたが、13世紀から15世紀まで継続して遺物が存在すると評価できるだろう。

C) 甚目寺町下萱津字南宿～宿ノ口～新替周辺（地点6～地点10）：古代と思われる須恵器長頸瓶の頸部（8）が最も古い資料である。一方、中世に属する資料は、13世紀中頃と思われる尾張型山茶碗（14）、14世紀代の東濃型山茶碗（11・13）、14世紀末から15世紀初頭に位置づけられる古瀬戸天目茶碗（9）などがある。また、この地点からやや離れるが、字池端に所在する妙淨寺では明応8年（1499）の紀年銘の宝篋印塔基部が存在する。妙淨寺そのものは中世まで遡ることはないが、地籍図では方形の微高地が存在することが判明しており寺院跡の

存在が予測されるものである。以上のことから、この地点は14世紀を中心に13世紀から15世紀まで継続して遺物が存在すると評価できる。

D) 甚目寺町下萱津南部（地点11～地点14）：東濃型山茶碗と瀬戸・美濃産陶器大窯製品が確認されている。山茶碗（16・18）は13～14世紀に属すると思われ、瀬戸・美濃産陶器には大窯第1段階に属する重圈皿（15）や仏餉具（17）がある。13世紀から16世紀まで遺物が存在しており、その中でも16世紀の資料が多い傾向があるかもしれない。なお、現宝泉寺には永正16年（1519）の紀年銘の宝篋印塔が存在するという（甚目寺教委内山氏からご教示を得た）。

E) 名古屋市中村区宿跡町周辺（地点15～地点19）：13～14世紀を主体とする東濃型山茶碗（19）と尾張型山茶碗（20・21）のみが確認されている。名古屋市中村区では甚目寺町よりも市街化が進み遺物を採集できる範囲が限定されている側面は考えられるが、遺物の採集量はやや少なく種類も山茶碗のみに限定される。少ない資料で即断することは避けなければならないが、時期的な広がりや器種の豊富さの面で甚目寺町側よりも劣る可能性がある。なお、今回遺物が採集された地点は、一部の例外はある

ものの概ね遺跡分布地図で周知の遺跡とされた範囲に合致するか近接している。

(3) 小結

以上、決して十分とはいえないが、現地踏査の結果を報告した。その結果、いくつかの傾向を読み取ることができる。これを以下の点にまとめておきたい。

1) 甚目寺町上萱津から下萱津までの五条川右岸の自然堤防上には13～15世紀の多様な遺物が採集されている。このことから五条川右岸の自然堤防上には13～15世紀の集落遺跡が存在することが予測される。遺物の採集頻度は南部の字宿ノ口周辺で高いことから、この地点で遺跡が稠密に展開する可能性もある。

2) 名古屋市中村区宿跡町周辺の庄内川左岸の自然堤防上には13～14世紀の山茶碗が採集されており、そこには13～14世紀の集落遺跡が存在することが予測されるが、時期幅が狭く遺跡は五条川右岸の集落遺跡に比べ散漫である可能性もある。

3) 五条川と庄内川に挟まれた新川町域では遺跡の存在の可能性は極めて低い。ただし、人々集落が存在しなかったか、河川により浸食されてしまったかについては定かではない。(鈴木正貴)

萱津宿の構造と性格

先に述べた五条川右岸の地籍図の分析と現在の地形の解析、考古学的知見、文献等に残る記述から、萱津宿の構造と性格に迫ろう。

(1) 萱津宿の津(図3・図5)

昔の津(船着き場)がどのような地点に存在したか問題であるが、津が成り立ちやすい河道との位置関係は集落が展開しやすい河道の張り出す内側の地点か河道の張り出す攻撃面側の地

点が考えられる。愛知県の江戸時代から大正時代に流れていた佐屋川の事例^(註2)や高瀬船が泊まる地点と考えられる「猿尾」が河道の攻撃面側に設けられる類例^(註3)が知られている点から想定するならば、昔の津は河道の張り出す攻撃面側に接して存在した可能性が高い^(註4)。このような視点から明治17年作成の地籍図をもとに考えると、萱津宿の津は上萱津村の微高地5d・5eの北側地点、中萱津村の微高地5i・5mの東側地点が旧五条川の津として、微高地5mの南側の地点(低地部4)が旧庄内川の津として推定できる。庄内川左岸にある津は日比津村南西側の地点、稲葉地村北側の地点、稲葉地村南西側の地点に推定でき、今まで知られる地名から萱津の東宿の津は稲葉地村北側の地点である可能性がある。

以上のことから萱津宿の津は旧木曽川水系から流れる旧五条川の津と旧庄内川の津としての性格を併せ持つ宿である可能性が高く、旧庄内川左岸において推定できる津は、時期的には15世紀以後の新しい可能性があるが、地理的には旧庄内川の津である。また先に述べた萱津の東宿の津の可能性のある稲葉地村北側の地点は同時に旧庄内川から分流する旧流路Cの中継地としての津の可能性が高い(図4)。旧流路Cは現在の荒子川の流れに近い流路が推定でき、伊勢湾に注ぎ込んでいた可能性が高い旧河道である。中世の旅人や物資が萱津の東宿を介して熱田まで運ばれていた可能性も高い。

(2) 萱津と富田荘の関係(図3～図5・図7)

『富田荘絵図』には描かれているものと描かれていないものであるが、考古学的知見からは河道アや河道イ付近の「萱津宿」付近の寺等の表現や「富田庄内賀茂須賀」の表現されている地点付近の地表面から中世の遺物が表面採集でき、中世の人々の営みが想定できたが、絵図

註2: 愛西市八開郷土資料保存館蔵 故加藤安雄氏旧蔵資料「佐屋川通地図」

愛西市教育委員会社会教育課文化財係石田泰弘氏によりご教示頂いた。

註3: 山陽新聞2006年11月16日記事「江戸期の石組堤防遺構「猿尾」修復に着手」の記述

また「猿尾」などの江戸時代以前の川除堤防の方法として、江沢甚一 1956「第三章 施行技術 第三節 川除堤防」真田秀吉編、日本学術振興会発行『明治前日本土木史』において、河川における川除堤防の施行技術としてある「川除こころへの事」中の記述にその方法の一つとして挙げられている(日本学士院日本科学史刊行会編 1981『明治前日本土木史』新訂版に再録されている)。この「猿尾」の工法は明治以後の「ケレップ水制」と同様な方法である。

註4: 津の位置については河道の滑走斜面側に津が存在した事例がある事を愛知県立大学山田正浩氏によりご教示頂いた。記して感謝の意とともに、今後の検討課題としたい。

に表現されていない地点（下萱津村の集落付近や旧稻葉地村の北側集落と南側集落の間の微高地）においても、中世の遺物が表面採集できることから、中世の人々の営みが同様に存在したものと思われる。またこれまでに『富田荘絵図』において「千音寺」や「伊麦里」等と表現された建物表現がない地点においても、中世の遺物が表面採集されており、中世の人々の営みが存在した可能性が高いため、『富田荘絵図』に描かれた建物表現は富田荘関連の荘官等の住居等の建物や機関の建物施設、または富田荘と縁がある者の住居等の建物などが表現されているものと推定されている（蔭山 2005）。

このように考えると萱津の上萱津村から中萱津村、下萱津村の北端部に想定される萱津宿の地点は『富田荘絵図』にも描かれており、富田荘と関係が深い地点、あるいは富田荘が強く意識している地点と考えられるが、現在の萱津の東宿とされる地点は、中世の遺物が表面採集できているにもかかわらず、『富田荘絵図』に描かれていないことから、富田荘とあまり関係がない地点、富田荘からの意識が薄い地点と考えられる。

また『富田荘絵図』の作成された14世紀中頃には存在したと思われる上萱津村の妙勝寺や甚目寺村にある古代寺院の甚目寺は絵図には描かれておらず、先の考えに立てば、富田荘との関係がない寺院、富田荘の支配権が及ばない寺院であった可能性が高い。（蔭山誠一）

（3）14世紀の萱津の景観（図9）

以上の分析から『富田荘絵図』の描かれた14世紀中頃を中心とした萱津宿の景観を復元してみたい。五条川右岸の地域では、地籍図の解析から旧五条川が地籍図の微高地群5と微高地群6の間を流れ、現在の五条川と新川の合流地点の北東側にて旧庄内川と合流し、旧庄内川が下萱津村の東側の地点に及び、南に流れを変えて稻葉地村南西側の地点に流れた点と旧五条川の川岸の分析から萱津の津は先に述べた上萱津村の北側の地点、中萱津村東側の地点、下萱津村北東端の地点の3箇所が想定できた。また現在の道路で鎌倉街道と推定されている南北の道を絵図の道イに、実成寺東の東西の道を絵図の道チに想定すると、先に述べた微高地の分布

と絵図に描かれた道イの西側に絵図に描かれた寺院群が展開したものと考えられる。道イは微高地群Aを東西に走り、八ツ屋村北西部から長牧村南部にて北に屈曲して下萱津村に残る鎌倉街道につながるものと考えられる。この状態にこれまでに史跡とされている地点や中世の遺物が表面採集できた地点等と甚目寺町史に記述された萱津の七寺の伝承をもとに大胆に微地形の起伏（地籍図の微高地5e・微高地5g・微高地5m・微高地5i・微高地5u）に応じて寺院群を想定すると推定される鎌倉街道の西側に沿って6箇所の方形状の区域が想定される。これらの地点では鎌倉時代から室町時代にかけての遺物が比較的容易にかつ多量に表面採集でき、萱津宿が存在した時期の中心的施設が存在した可能性が高い。さらに鎌倉街道の東に微高地がびる地籍図の微高地5e・微高地5g・微高地5m南側の地点は、絵図において「富田」「富田庄」と描かれた区域と対応し、建物も描かれている。また絵図において「萱津宿」と書かれた地点は津の存在が推定される中萱津村東側の地点に近接し、「光明寺」や三島神社の門前と対応して、何らかの施設や市が開かれたような場所が存在した可能性がある。一方で下萱津南部などにおいても中世の遺物や史跡が見られ、町場とは異なる散在的集落が展開する田園景観が展開していたものと想定できる。

庄内川左岸では、地籍図に残る旧庄内川の流れの痕跡から①日比津村南西地点、②稻葉地村北側地点、③稻葉地村南西側地点の3地点において津の可能性がある。この内、前述のように『尾張徇行記』の記述した結果からは、街道と交差する津の位置は②稻葉地村北側地点と推定できた。ただし地籍図からの分析では②稻葉地村北側地点の凹みは15世紀～16世紀頃と比較的新しい時期と推定した旧流路Cを切っており、近世に形成されたと考える事もできる。ここでは②稻葉地村北側地点の凹みの形成時期について両論を併記しておくが、絵図との対応関係を重視すると、14世紀の庄内川が①日比津村南西地点および②稻葉地村北側地点で蛇行したと考えにくく、稻葉地村西側の地点付近を蛇行して流れていた可能性が高いと思われる。そしてその南側の地点が絵図の中の「富田庄内賀

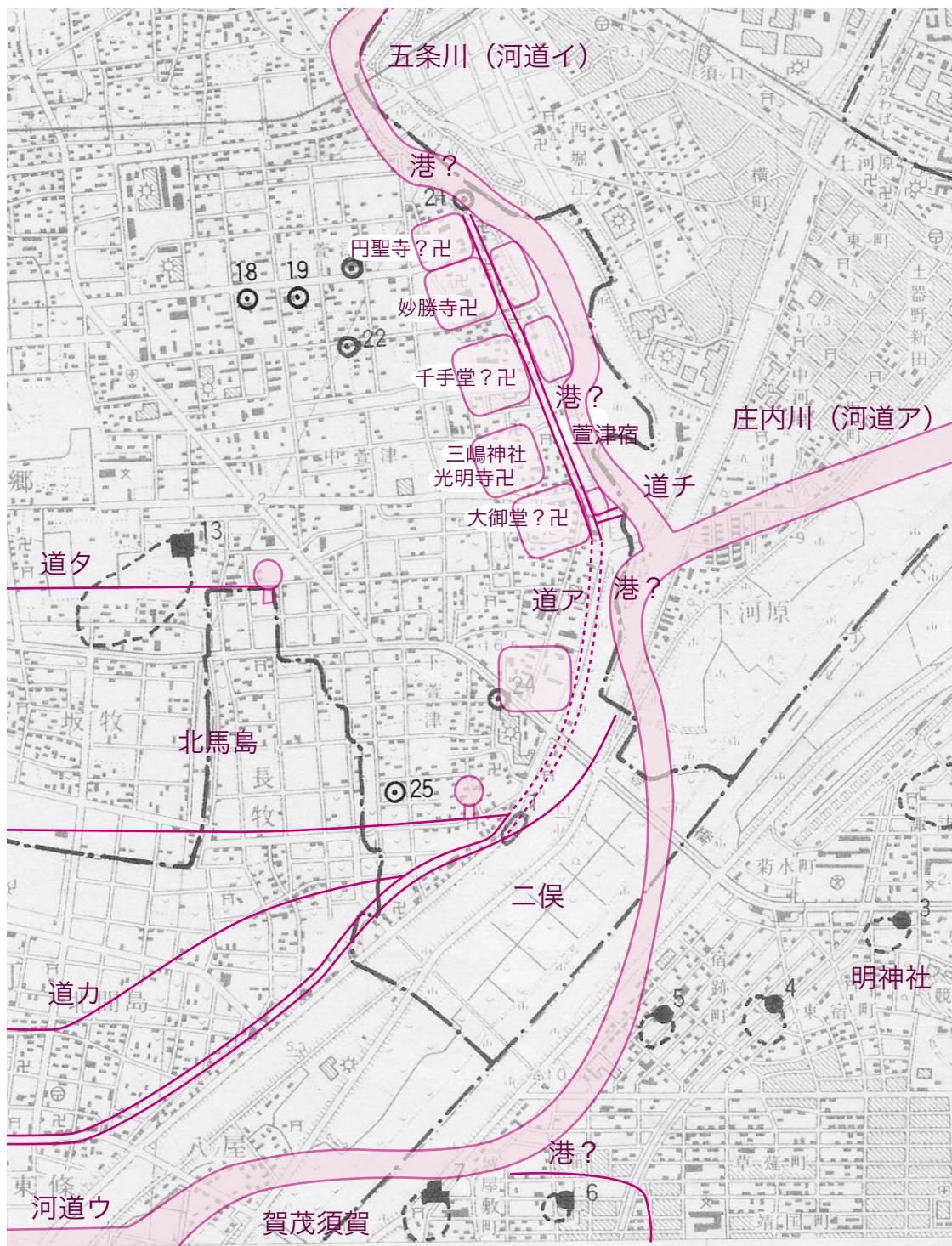


図9 14世紀の萱津の復元イメージ図

茂須賀」と7棟の建物が描かれた地点と想定される。このように考えると、萱津の東宿とされる名古屋市中村区東宿町付近は14世紀の庄内川の流路から離れた位置にあることとなる。必ずしも庄内川の流路が一筋の河道で存在した訳ではないと考えられるため断定する事はできないが、地籍図による地形分析を重視すると14世紀における名古屋市中村区東宿町付近が津の機能を持つ地点とは考えにくい。明治17年作成の地籍図において稻葉地村の宅地が展開する北側の地点と南西側の地点に挟まれた地点は、現地形の等高線の分布からもやや谷状の地形になつておらず、中世の遺物が表面採集できる点では中世の人々の営みが存在する遺跡と考えられる。しかし、先に触れた絵図に「富田庄内賀茂須賀」と描かれた地点のような地域の中心的存在となる場が形成されたとは考えられず、町場とは異なる散在的集落が展開していたものと想定できる。(鈴木正貴・蔭山誠一)

まとめ - 今後の課題 -

今回、中世の尾張国海部郡萱津周辺を素材として取り上げ、その景観復元を主目的として検討を行った。我々は、考古学的手法だけにこだわらず、多角的な視野からの総合的な判断を目指とした。

これまでに尾張国富田荘を取り上げて、中世集落の総合的な研究を目指し、平成15年度の研究紀要第5号においてその分析結果がある。そこでは、文献の調査と現地踏査を基本としつつ、地籍図の分析、地質学的な分析を加えて、一定の成果を導き出されている。我々はこれらの研究成果をもとに、新たなテーマを求めた。その結果、庄内川をさかのぼった萱津地区を選定し、さらなる景観復元を試みたのが今回の分析である。

地籍図の分析においては前回同様に、明治期における土地利用の実態から微高地と低地を割り出し、24微高地群と21低地部を認識した。これらの相対関係から河川堆積の痕跡を抽出し、旧河道の流れに時期的変遷を推定した。この推定した旧河道痕跡からは、絵図に描かれた「富田庄内賀茂須賀」周辺を推定することが出

来、さらに中世を基準とした河道の新旧変遷を推定するにいたつた。

分析のたたき台とした現地踏査においては、地点による採集資料の粗密、それらの製作時期、産地等を調べ、これらを比較することによって各地点の性格を分析した。その結果、現地踏査という手法によっては、五条川右岸の自然堤防上にあたる大字上・中・下萱津周辺においてもっとも濃密な遺物分布が確認され、13～15世紀を通じて継続して営まれた中心的集落の存在が推定された。さらに庄内川左岸側にも、13～14世紀の集落が散在した可能性が考えられ、五条川と庄内川にはさまれた合併前の新川町域では、遺跡が存在する可能性がきわめて低いことが判明した。

これらの分析に加えて、現在の測量図に記された標高値から、等高線図を作成して地形解析を行った。その結果、今回の分析対象地点では、概ね北東から南西に至る傾斜がみとめられた。そして、周辺と比較してきわめて標高の高い、人工改変された部分が抽出できた。さらに地籍図の土地利用の状況と、推定された微高地群や低地部の対応関係から、旧地形の推測が得やすいエリアだと判断できた。ただしこれらの分析は、現地踏査という限定された資料採集と、明治期における土地の利用状況から判断した旧流路の復元など、精度において確実とは言いきれない問題点を含んでいることを明記しておく。

以上の結果により、萱津宿、富田庄内賀茂須賀といった富田荘絵図の地点をおおまかに特定した。これらをふまえて、河川交通上の萱津宿を考えると、旧五条・庄内両河川での津として位置付けられる。こうした河川交通上の要衝は、絵図の表現から富田荘との関係の深さが推測されるが、陸路においても鎌倉街道の宿場として機能していた。ただし、それは今回の分析でも判明したように、旧河道の流路が固定化されていない以上、定点としての捉え方には慎重にならざるをえない。したがって、河濱の位置、萱津宿の位置や規模、鎌倉街道の通過地点などは、河道の変遷とともに変化したものと考えたい。萱津宿周辺の景観を考える場合、こうした環境をふまえて、捉えてゆく必要がある。

萱津の所在する尾張地域の沖積低地では、主

要河川だけでなく、それらの支流も含めて、自然的な要因による変化が常に繰り返された。そうした環境下では、体制による支配、管理も隅々まで届きにくく、必然的に小豪族が群雄割拠する多元的な支配体制が続く。交通手段の主流は、現代の生活からイメージされる様相とは異なり、あくまでも水上交通であり、陸上交通は短距離か長距離の補足的な手段とされていた。萱津の宿場を形成していたと思われる上・中・下萱津の地点も、水上交通、交易の要衝と考えた方が実態に近いかもしれない。これらの実態をさらに解明してゆくためには、現地踏査で良好な結果が得られた地点の発掘調査が必要であり、そのためには遺跡としての認定を整える必要があるであろう。そして、この分析対象となる地域を広げて、総合的な地域研究とすることが課題と考える。ここで提示した共同研究の試みは、今後さらなる分析材料を積み上げてゆくことによって、より具体的な景観を導き出すことができるものと期待したい。(松田 訓)

謝辞

本論を作成するにあたり、愛西市教育委員会石田泰弘氏と甚目寺町教育委員会内山伸也氏には多くのご教示を受けた。また旧西枇杷島町役場・旧新川町役場・旧甚目寺町役場の各諸機関には都市計画図の入手に際して便宜を図っていただいた。地形解析図の原図の作成では愛知県埋蔵文化財センター整理補助員の村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

平成19年2月4日に萱津の現地踏査と検討会を行った。その際に多くのご教示を賜った。参加者は以下の方々である。記して感謝の意としたい。

新井重式、伊藤俊一、上村喜久子、宇佐見守、岡本直久、海津一郎、金子健一、柴垣勇夫、鈴木とよ江、都築暢也、永井宏幸、藤本誉博、水野智之、水野明日香、溝口智世、山田正浩、山村亜希、綿貫友子(五十音順敬称略)

参考文献

中・近世研究部会 2004 「尾張国富田荘の考古学的研究 - 成願寺を中心として -」『研究紀要』第5号、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

藤山誠一 2005 「七宝町の中の富田荘～絵図に描かれた荘園と描かれなかつたもの～」平成16年海部津島の歴史を考える講演会(2005年2月21日、於 七宝町公民館)、口頭発表資料

加藤博紀 2006 「地籍図・史料から見た中世の甚目寺町」『研究紀要』第7号、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター